

## 出題傾向

本年度も大問8問で、設問数45という構成であった。ただし、大問6と大問7は、「中文」、つまり短い長文問題が2問ずつ含まれるので、大問計10問と見ることもできる。試験時間は60分だから、途中で手間取ったりすると、最後の長文で時間が足りなくなってしまうことになる可能性がある。わからない問題は後回しにして、とにかく一定のペースで解いていき、とりあえず最後まで解答してしまうということが大切である。ただ、その一方で、いずれの問題も基礎～標準くらいのレベルであるため、確実に正解を積み上げていかないと合格圏に入ることが難しいことも事実である。スピードと正確さのバランスをとるということを普段の勉強の中でも意識しておきたい。

問題は、①発音問題、②文法・語法問題（選択問題）、③文法・語法問題（正誤判定）、④会話文問題、⑤長文空所補充問題3問、⑥長文総合問題、⑦その他2問、とオールラウンドタイプの出題となっている。レベルは、上でも述べたように基礎～標準で、高校の教科書で対応できるものである。

全体としての特徴は、会話文も含めると、長文の空所完成の設問数が16もあることだ。これは全体の設問数45に対して、約3分の1にあたる。練習によって十分に慣れておきたい出題形式である。また、長文は標準レベルで読みやすく、とりつきやすいとは言え、設問の選択肢には迷うようなものも含まれており、軽視は禁物だ。発音や文法・語法関係はきわめて基本的なもののなので、8割以上の得点を目指す必要があるだろう。

## 学習対策

全体に高校教科書レベルの「基礎力」を重視した問題が多い。その傾向に基づいた学習のしかたをアドバイスしておこう。

### ◆発音問題

出題されるのは、英語Ⅰおよび英語Ⅱの教科書に出てくるような単語ばかりである。ふだんから英語を音読する習慣が身についている人には容易だが、そうでない人にとっては失点しやすい問題となる。まず英語の発音記号を読むようにするのが先決だ。発音記号が読めるようになったら、英語ⅠとⅡの教科書の各課の新出単語（ふつう教科書の下、もしくは横の欄外についている）の発音を総チェックしておこう。もちろん、意味があやふやなものについては、ついでにもう一度辞書をチェックしながら進めるとよいだろう。

### ◆文法・語法問題

ほとんどが基本問題で、これもライティングを含めた高校の教科書で十分に対応できるものばかりだ。もちろん、基本的な「文法・語法問題集」は1冊マスターしておく方がよい。狙われているのは、基本事項の理解度なので、やたら問題数をこなすよりはむしろ、不定詞、分詞、助動詞、仮定法、関係詞など、各文法項目を確実に理解し、身につけることの方が重要である。語法関係も重要基本単語の使い方が問題とされている。たとえば、今年度の問題の中に問題されたdelightedとdelightfulは、日本語ではどちらも「楽しい、うれしい」だが、その使い方の違いはマスターできているだろうか。これと同様の意味をもつpleasingとpleased、さらにpleasureとの違いを「例文レベル」で言えるだろうか。こういう問題に強くなるためには、単に単語の意味だけで満足するのではなく、常に辞書の例文を見てその使い方（これを語法と言うのだが）にも注意を払っておく必要がある。比較的易しめの単語、つまり英語Ⅰ、Ⅱおよびライティングの教科書のPart 1に出てくるような単語については、このような態度で勉強しておくことが重要だ。

### ◆会話文問題

英語には、You can say it again.（その通りさ）やServes you right.（いい気味だ）など、会話独特の表現もあるが、本学の会話文問題は、そういう特殊なものを狙ってはいない。特殊な会話表現は、英語の発想を知るには興味深い、英語の本質とは言えないからである。本学の会話文問題は、文法・語法問題や長文問題の変形だと思えばよい。したがって、これらの問題についての対策の中で十分対応できる内容である。

### ◆長文問題

本学の場合、本格的な「長文」と言えるのは最後の1問だけで、あとは「中文」と言った方がよいだろう。＜出題傾向＞でも述べたように、英文は標準的で読みやすいものが多いが、設問に空所補充が多いのが特徴である。また、その空所補充の多くは、単語の意味や語法を中心とした設問となっているため、ここでも語法力がものを言いそうだ。

長文の勉強には2つのステップが考えられる。

第1のステップは、英語の構文をしっかり読みとれる力をつけること。どれが主語で、どれが目的語で、どこが分詞構文で、関係節の構造がどうなっていて、どこが挿入され、どこが同格になっていて、…など、文法的に正確に読む力は十分身につけているだろうか。自信がない人は、今からでもこの勉強をしっかりしておくことが重要だ。これがしっかり身につけていれば、長文を読めば読むほど力がつくが、構文力が不十分な場合には、長文の勉強をしても空回りということになりかねない。具体的には、数行ぐらいの英文でよいので、辞書を使いながら和訳をノートに書いていこう。もちろん日本語にすること自体が目的ではないのだが、日本語にしようとすることで英語の構造をしっかりと意識できるようになることがメリットだ。2か月で100題くらいを目標とするのがよいだろう。

第2のステップは、いわゆる長文読解練習だ。今度は辞書をできるだけ引かず、10分程度と時間を決め、その中で長文を読み切る練習をする。勉強の素材は本学の過去問の他、センター試験の長文や、本学のレベルに近い標準レベルの長文問題集を使うのがよいだろう。目標は2か月で50題。

本学の問題には難問、奇問は一切ない。着実な基礎学習こそが合格への近道であることを再度強調しておきたい。健闘を祈る。